



2010年3月3日放送

印象に残る症例①

池野 一秀

小児科医として診療していると、生まれたての新生児から中学生、さらには卒業した後、成人までの幅広い年齢層のお子さんに関わりをもちます。中でも思春期は、体の発育に伴い内分泌系、自律神経系、免疫、そして精神的にもダイナミックに変化する難しいお年頃です。さらに受験というストレスが、重くのしかかり、様々な不定愁訴を引き起こすことがあります。今回は、入学試験から新入学に伴う生活パターンの変化とストレスから起こる症状についてお話をしたいと思います。

Mさんは、14歳の女性です。小学校入学前から、アレルギー疾患で小児科を受診しており、中学生になってからは、腹痛や立ちくらみなど自律神経失調症状で治療を受けていました。中学二年生の冬、学校で父兄懇談会がある季節に、「最近頭痛がひどくて眠れない」との訴えがありました。頭痛の部位は一定せず、拍動性や前兆はありませんでした。肩や頸部の筋肉のコリもひどくありません。

もともと、起立性調節障害の診断があり、脈の細い患者さんだったのですが、この時は、脈が非常に沈んで、手足も冷え切っていました。夜も、布団の中で足が冷えて、しびれるほどだと言います。また、臍傍の圧痛もあり、舌下静脈の怒張も認めたことより、瘀血も

関与しているものと思われました。以前より、しばしば腹痛も訴えていましたので、当帰建中湯と真武湯を選択し、附子末も加えて投与しました。

二週間後、年末の最後の外来で、診察したところ、手足も温まり、頭痛もずっと軽減していました。そして、そのまま、無事に年末とお正月を過ごすことができました。冬休みが終わり、学校が始まると、頭痛が再び悪化し、「朝起きてから一日中ずっと痛い、夜も寝付けない、吐き気もある。」と訴えます。頭痛にポイントを絞り、呉茱萸湯を出してみましたが、あまり効果がありません。手足の冷えも強いので、当帰四逆加呉茱萸生姜湯に変更しましたが、あまり変わりありません。食事中には少し頭痛が楽になるという訴えより、筋収縮の緩和のため、芍薬甘草湯を頓服で処方したところ「多少は違うかもしれない。」という程度でした。

その間、MRIなど画像診断も行い、脳外科の診察も受けましたが、脳外科的疾患や偏頭痛は否定的でした。また、自律神経発作を疑って脳波を確認し、診断的治療として抗痙攣剤も内服してもらったのですが、頭痛が改善する傾向はありませんでした。

とにかく家に帰って宿題をしようとしても頭が痛くて手がつかないといえます。夜も布団に入ってから、「痛い、痛い・・・」と泣きながら、泣き疲れて眠るような状況だったそうです。その割には、診察時にはあまり痛そうなそぶりはありません。よく聞いてみると、病院に着いて車を降りると不思議に痛みが和らぐのだそうです。本人から聞くと「病院にすれば、先生がこの痛みをなんとかしてくれるかもしれない。そう考えるだけで、気が楽になって痛くなくなる。」と言います。それだけ期待されると主治医としては嬉しい反面、自分も頭が痛くなりそうなプレッシャーに襲われます。しかも、「なかなか良くならなくてごめんね。」と謝ると、本人もお母さんも一緒になって、「こんなに一生懸命診てもらっているのに、ちっとも治らなくて申し訳ありません。」と逆に頭を下げられてしまいました。こうしたエピソードから、ストレスの関与を強く疑い、胸脇苦満と腹直筋の緊張を目標に柴胡桂枝湯を出したところ、かなり症状が和らぎ、参加できるかどうか心配していた修学旅行にも楽しく行くことができました。

その後、梅雨時になり、歯痕など水滞の兆候がでてきたため、当帰芍薬散と補中益気湯に変更し、頭痛の頻度も程度もかなり減少して、夜は普通に眠れるようになりました。さらに、夏休みに入ってから、頭痛はほとんどなくなり、元からあった起立性調節障害の症状が強くなったため、半夏白朮天麻湯など利尿作用のある処方、夏と秋を乗り切りました。

しかし、中学三年の冬になり、受験に向けて志望校の選択をするころに、また激しい頭痛が再発しました。このころ、受験をめぐるお父さんとの口論も絶えなかったそうです。以前の状況を踏まえて、頭痛そのものよりも根本にあるストレスの解消を目標として、柴胡桂枝乾姜湯を中心とした処方を組みました。時に、当帰芍薬散など利尿作用のある薬も併用しました。以前と違い、頭痛は続くものの、我慢できないほどではありませんでした。本人にも「試験が終われば治るから大丈夫。」と言い聞かせ、外来では医学的な注意よりも、

受験生としての生活のアドバイスを話して帰ることが多くなりました。そして、3月、結果の発表の後、「頭痛はぜんぜん無くなりました。先生の言ったとおりです。」と満面の笑みを浮かべた彼女が合格の知らせを持ってきてくれました。その時、私が彼女に言った「自分の大学合格の知らせより嬉しいよ。」という言葉に嘘偽りは全くありませんでした。

思春期に心身が不安定になることと、受験のストレスは今に始まったことではありません。しかし、恵まれた環境で育った現代っ子は、ストレスに対する適応が悪く、また、少子化の影響もあって受験に対する親の期待も、子供に与えるプレッシャーも年々増加していると思われます。受験もそうですが、新しい学校に入学して、新生活を始めるにあたり、さらにストレスが増すこともあります。こうした環境の変化や、学校行事のストレスが、様々な不定愁訴の原因になっている場合がしばしば見られます。特に春は、入学試験や新入学に伴う生活パターンの変化とストレスで、それまで目立たなかった不定愁訴がいっせいに現れる季節です。

以前、不定愁訴で初診となった患者さんの月ごとの分布を男女別に調べたことがあります。男性患者では一定の傾向はありませんが、女性患者は3月から5月の春に明らかに多いのが確認できました。

また、ある年の5月の初診で不定愁訴に対し継続治療を要した患者の男女比では、女性が7割と大多数を占めていました。

早春から梅雨時にみられ、圧倒的に女性に多いこれらの症候を、私は「春の女神症候群」と呼び、インフォームド・コンセントに役立てています。春先に雪解けの地上に花を咲かせ、夏になるといつの間にか姿を消す春の女神たちの伝説があります。初診時の季節が春に集中することが、彼女たちを“春の女神”とよぶに至った最大の理由です。こうした患者さんに対する治療ですが、全体的にみると柴胡剤を基本とし、冷えと水毒に対する処方が有効性を示します。このことから、春の女神症候群の病態には、気鬱や肝気の亢進が元となり、水滯や冷えが関与している可能性が示唆されます。

また、春の女神症候群という診断名を使う効用ですが、自分の病状に悩み、心ない医療関係者から「検査に異常がない」「気のせいだ」と言われ、ときに「たるんでいる」「更年期障害だろう」などとの的外れなそしりを受けている少女たちの耳に“春の女神症候群”という病名は大変心地よく響くようです。そして、たとえ漢方薬のように飲みにくい薬であっても、病気を治すために飲み続けようというモチベーションをもつことができるのでしよう。

最後に、新入学以来体調不良の続いていた女子高校生の言葉を紹介します。「何か重い病気があるのではないかと不安だった。“春の女神症候群”と言われ、ああ、そうだったんだと納得したら、体が楽になった」。

皆さんも、春先に体の不調に悩む可愛そうな少女たちを、「春の女神」と呼んであげて下さい。